

# 私鉄企業とプロ野球の関係

— 南海と近鉄の場合 —

## The Relationship between Private Railway Companies and Professional Baseball

— Specifically Nankai and Kintetsu —

廣 田 誠

The relationship between Osaka's major private railways and professional baseball began before professional baseball started in Japan, and four companies-Hanshin, Hankyu, Nankai, and Kintetsu- have owned a professional baseball team. Currently, however, only the Hanshin Tigers are a professional baseball team and Koshien are a stadium managed by a major private railway company in Osaka. In this paper, I would like to consider the characteristics and significance of the management of the baseball team and the stadium, regarding two of the major private railway companies in Osaka, Nankai and Kintetsu. Both companies entered professional baseball behind other companies.

Makoto Hirota

JEL : N

キーワード : プロ野球、私鉄、野球場、南海電気鉄道、近畿日本鉄道

Keywords : professional baseball, private railway, baseball Ground, Nankai Electric Railway, Kinki Nippon Railway

### はじめに

周知のごとく、歴史的にみた関西の鉄道企業とプロ野球の関わりは深く、しかもそれは日本におけるプロ野球の発足前からのことであった。その先駆は1913年、箕面有馬電気軌道（のちの阪急電鉄）による豊中グラウンド（運動

場)の開設である。また 1922 年、京阪電鉄が京阪グラウンドを開設し<sup>1)</sup>、1924 年には阪神電気鉄道が甲子園球場を開場した<sup>2)</sup>。さらにこれらの動きに刺激され、1928 年、のちに近鉄の一部となる大阪鉄道<sup>3)</sup>が、住宅地に自然体験学習のための花卉園や果樹園、そしてスポーツ施設を併設した藤井寺経営地へ藤井寺球場を開場した<sup>4)</sup>。このように在阪私鉄各社は、日本における本格的プロ野球の発足以前より、球場の建設と運営を通じて野球とのかかわりを深めつつあった。

また在阪大手私鉄五社中四社(阪神、阪急、南海、近鉄)はプロ野球チームを保有した経験を持ち、しかも近鉄を除く三社は戦前期からチームを保有していた。特にリーグの発足と同時にプロ野球に参入した阪神と阪急は、ともに当時としてははずば抜けた規模と内容を持つ本拠地球場を保有し(阪神=甲子園球場、阪急=西宮球場)、またそれらは首都圏地域で初の本格的なプロ野球の本拠地球場となった後楽園球場に先駆けるものであった。これらに加え南海が戦後に開設した大阪球場は、阪急の西宮球場と並び関西地域におけるナイトー(ナイトゲーム)開催の先駆となった。これらは、鉄道会社をオーナー企業とするチームの少なさも一因となって 1970 年代まで慢性的な球場不足に悩まされていた首都圏地域との大いなる相違であった<sup>5)</sup>。

1) 京阪電気鉄道株式会社 2011、128～129 頁、696～697 頁。

2) 阪神電気鉄道株式会社 2005、162 頁

3) 1898 年、河陽鉄道として柏原—古市間を開業(翌年河南鉄道に再編)。1919 年大阪市への乗り入れを目指して社名を大阪鉄道へ改称し、1922 年に道明寺—布忍間を開業。1923 年大阪天王寺—道明寺間開業。1929 年久米寺駅(現在の樞原神宮前駅)までの路線を建設して吉野鉄道(今の近鉄吉野線)との乗り入れを開始。しかしこの路線延長に伴う過大な投資により経営が苦境に陥り、ついには競合企業であった大阪電気軌道(大軌)の系列下に入った。1935 年頃には沿線の宅地化(藤井寺や古市など)が進んで乗客が増加、経営好転の兆しが見られたが、戦時下の 1943 年、大軌の後身である関西急行鉄道(関急)に合併された。

4) 大正中期に勃興した野球ブーム、とりわけ夏季に開催される全国中等学校優勝野球大会が全国的な人気を博していたことから球場建設に踏み切ったもので、1927 年 11 月着工、1928 年 5 月 25 日に竣工した。敷地面積約 1 万 3000 坪、収容人員約 3 万人の規模を誇り、関西六大大野球のリーグ戦などに使用された(以上藤井寺球場に関する記述は、近畿日本鉄道株式会社 2010、111 頁による)。

5) 以下の新聞記事が示す通り、昭和 30 年代初頭の首都圏地域においては、セ・パ両リーグとも多数の球団が少数の球場の使用権を巡って激しい争いを繰り広げていた。

しかしながら今日、在阪大手私鉄の経営するプロ野球チームはタイガースのみとなり、また在阪大手私鉄が運営する野球場として存続しているのも甲子園球場のみで、その他の球場はショッピングモールなどに転用され姿を消した。本稿ではこれら在阪大手私鉄のうち、遅れてプロ野球に参入し、また2リーグ分裂後はともにパ・リーグに属して球団を運営した南海と近鉄について、球団と球場の運営に関する歴史的推移とその特徴・意義を考察したい。

## 1. 南海鉄道のプロ野球への参入

1934年、日米野球のために結成された全日本軍を母体として、プロ球団・大日本東京野球倶楽部（讀賣ジャイアンツの前身）が創設された。これに続き1934年、阪神電気鉄道により大阪野球倶楽部（大阪タイガース）が設立された。さらに翌1936年、日本職業野球連盟が設立され、大日本野球連盟名古屋

---

「◇大洋ホエールズのフランチャイズが横浜地区に本決まりとなった。これで現在のプロ野球球団の半分までが、東京を中心とした関東地区に集まった。セ・リーグでは六球団中、巨人、国鉄、大洋の三チーム、パ・リーグでは八球団中、毎日、大映、東映、トンボの四チーム、計七チームが肩をならべたわけであるが、満足に使える球場は後楽園と川崎の二つだけ。駒沢も横浜もまだナイター設備のない・・・球場で、プロ野球の常打ち球場とするには今後バク大な金をかけなければならぬ。これが今シーズンにうまく間に合うとしても七チームで四球場と・・・えらい混み方で、今後も球場の振り当てが大変だ・・・」（『球場難に割り込み（木曜放談 プロ野球）』『東京新聞』1955年1月13日）

「先日の大洋ホエールズの川崎球場での初試合には、象をくり出すなどのお祭り騒ぎでその前途を祝った。長年にわたって”フランチャイズの孤児”として転々と渡りあるいていた大洋ホエールズがやつと本拠地にありついて、じっくり腰をすえてゲームをやることができるようになったのだからめでたいことには違いない。・・・しかし同チームの川崎のフランチャイズについてはちょっと合点しかねるふしがある。たしか今シーズン初め、大洋ホエールズがこちらにフランチャイズを移す時には、はじめ横浜地区と決めたと記憶している。・・・だから、横浜あたりにプロ野球常打ちの球場が新たにできるものとばかり思っていたが、シーズンに入っても一向にそのことがない。川崎球場は昨年高橋ユニオンズができてこゝをフランチャイズと決めた時に、あすこは巨人国鉄の補助球場だから専用は許さない」と文句が出たはずだ。その後パ・リーグでも毎日と大映がこゝを補助球場ときめた。こう千客万来ではなかなか新参が割り込む余地がない。そこで、一応横浜と決めただけであろうが、ほかに球場がないのだから、いきおい、川崎球場を使わざるを得なくなってくる。何でも大洋の川崎進出は最初が同一リーグの国鉄にさえ何のあいさつもなかったという・・・。大洋は結局、ここで五十試合を消化する予定だそうだが、それではまるで他人の家に表札をかけて住んでいるようなものだ。・・・」（『他人の家に表札？（木曜放談 プロ野球）』『東京新聞』1955年4月14日）

協会（名古屋軍）、東京野球協会（東京セネターズ）、名古屋野球倶楽部（名古屋金鯱軍）、大阪阪急野球協会（阪急職業野球団、通称阪急軍）、大日本野球連盟東京協会（大東京軍）の各球団が加盟した<sup>6)</sup>。これらのうち阪急軍は、1936年、阪神急行電鉄の事業課に大阪阪急野球協会として創立されたものである<sup>7)</sup>。さらに1937年、阪急西宮球場が開場した。同球場は当時としては最新・最高の設備を備えた本拠地球場で、同年東京に開場した後楽園球場を内容では大きく上回るものであった。

さらに在阪私鉄では、南海鉄道が南海軍を設立した<sup>8)</sup>。南海鉄道が南海軍の創立をめざしたのは1937年のことで、翌1938年3月1日、南海軍（南海野球株式会社）が創立され、同月29日、日本職業野球連盟に加盟を申請した。しかしすでに8球団が春秋2シーズン制のペナントレースを展開しており、これに南海軍が加わると球団の数が奇数となり、常に1球団は試合ができないことになる。しかも発足が遅れた南海軍の陣容は貧弱で、監督<sup>9)</sup>のほかには選手はわずか14名、南海軍側も申請はしたものの、その行く末には不安を抱いていた。しかし各球団は加盟に賛成し、加盟に反対するものとみられていたジャイアンツも賛成を表明した。これには同じく鉄道会社をオーナー企業<sup>10)</sup>とするタイガースと阪急軍の根回しがあったと言われている。ただし加盟の条件として、南海軍は選手を補強し、さらにその実力を判定した上で秋のシーズンからペナントレースに出場が許されることとなった。

1939年8月11日、南海軍の本拠地球場として中百舌鳥球場が完成した<sup>11)</sup>。

- 6) なお日本職業野球連盟にはその後1937年、後楽園野球倶楽部（後楽園イーグルス）が加わった。
- 7) 『プロ野球 上 日本職業野球前夜からプロ野球興隆 ON 時代へ』37頁。
- 8) 以下南海軍の設立事情については、『さらば！南海ホークスー —激動の半世紀、浪花にロマンありがとう—』60頁による。
- 9) 南海軍の初代監督となった高須一雄は、慶応義塾大学を卒業後大阪毎日新聞社（大毎）に入社し、大正末期から昭和初期にかけて社会人野球で“日本一の実力チーム”と言われた大毎野球団で活躍していた。南海鉄道と大阪毎日新聞は浜寺海水浴場の「水練学校」で協力関係にあったため、高須が南海の初代監督に迎えられたのである（『さらば！南海ホークスー —激動の半世紀、浪花にロマンありがとう—』62頁）。
- 10) 本稿で言う「オーナー企業」とは、プロ野球チームの経営を担う企業（いわゆる親会社）を意味する。
- 11) 以下中百舌鳥球場の開設にかかわる記述は『さらば！南海ホークスー —激動の半世紀、浪花にロマンありがとう—』62頁による。

同球場は南海鉄道が百舌鳥駅附近に約五万坪の土地を買い入れ、ここに総合運動場の建設を計画する中で、一万坪を野球場として1937年9月頃より工事に着手していた（建設費50万円<sup>12)</sup>。完成式を半月後に控えた7月28日から三日間、ここで公式戦が行われた。それには日本職業野球連盟に加盟する九球団のうち名古屋軍とイーグルスを除く七球団が参加し、一日に三試合が行われた。しかし同球場は交通の便に恵まれなかったことから、1940年は二日間、41年は六日間、42年は三日間使用されたのみで、主として南海軍の公式戦は阪急西宮球場と阪神甲子園球場で開催された。

## 2. 後発ゆえ大胆な手法で戦力強化を図った南海軍

このように球界参入が遅れ、また連盟からチーム力の底上げを命じられるほど戦力が乏しかった南海軍は、時には強引とも言える手段を用いて戦力の向上を図った。そこにおいて特筆すべきは、戦後監督として南海の黄金時代を築き、三原脩、水原茂とともに日本プロ野球の「三大監督」と称された鶴岡（山本）一人の入団である<sup>13)</sup>。

鶴岡は1939年3月、法政大学の卒業と同時に南海軍と契約、入団した。鶴岡は、プロ野球の選手となっても一～二年後には兵役に服さねばならないため、選手層が薄く試合出場の機会が多いものと思われた南海軍を選んだ、と後年語っている。一刻も早くチーム力の向上を図りたい球団側と、より多くの出場機会を求めた鶴岡の思惑が一致して、後発の弱小球団南海軍への有力選手入団が実現したのである<sup>14)</sup>。

ところが鶴岡のプロ入りを知った法大野球部のOB会からは、鶴岡の除名を求める声が上がった。その理由は「卒業と同時に職業野球に入るとは、鶴岡は

12) 「百舌鳥に野球場、難波駅から二十分百舌鳥駅附近に約五万坪を買い入れ総合運動場を計画内一万坪を野球場（建設費五十万円）にすることし来る九月頃から工事に着手、明年四、五月頃完成の予定、同時に南海職業野球団を組織する筈」（『月曜特輯会社批判 業績漸次向上の南海鉄道一割配当は依然安定』『中外商業新報』1937年8月9日）

13) 以下鶴岡の入団に関する記述は『さらば！南海ホークスー ―激動の半世紀、浪花にロマンありがとう―』62頁による。

14) 鶴岡は入団と同時に主将に就任、また10本塁打を記録して本塁打王に輝き、南海軍に初のタイトルをもたらした。打率も2割8分5厘で第6位であった。

“野球芸人”になるつもりか。母校の恥だ」と言うものであった。日本でプロ野球が誕生した 1936 年から鶴岡が南海軍入りする前年の 1938 年までに、大学出身の選手は多数プロ入りしていたが、その大半は母校を中退しており、また卒業した者もまずアマチュアチームである実業団（社会人野球チーム）を経てプロ入りしていた。つまり鶴岡は大学卒業と同時にプロ野球チームに入団した初の選手で、これを OB 会が問題視したのである。このことは、当時のプロ野球選手に対する世間の評価を端的に示すと共に、参入の遅れを取り戻すためにはあえてこのように危うい橋を渡らなければならなかった南海軍のチーム事情をみて取ることができる。

この除名問題は、結局鶴岡の知人のとりなしによって事なきを得たが、さらに問題となったのは契約条件であった。当時、新人選手の支度金（今日の契約金）には 3000 円の上限が設けられていたが、これを南海軍は無視し、上限の二倍にあたる 6000 円の支度金を支払い、また月給 250 円、さらに兵役に服した場合は、選手として復帰するまで毎月 50 円を送金する、との好条件で鶴岡に入団を承諾させていた。しかしこの問題もまた、南海軍に対し厳しい処分がなされることなく終わった。

さらに南海軍の選手獲得に対するあくなき姿勢を示すのは、清水秀雄の獲得である<sup>15)</sup>。明治大学（明大）専門部に在学していた清水は、1937 年春から 38 秋にかけて明大が東京六大学リーグで 4 連覇を達成した際の主力投手で、1940 年春には専門部の卒業を目前に控えていた。大学側は当然清水が学部へ進学するものと考えていたが、清水自身はプロ入り志望で、しかも鶴岡が属する南海軍への入団を望んでいた。これを知った鶴岡は、1940 年 1 月清水を大阪へ呼び、南海軍と契約させた。このようにして、兵役のためながらわずか一年でチームを去る<sup>16)</sup>「罪滅ぼし」に清水を入団させた鶴岡は、明大応援団に呼び出され、学部へ進学するはずの清水をプロへ入団させたことを厳しく叱責された

15) 以下清水秀雄の南海軍入団に関する記述は『さらば！ 南海ホークスー ——激動の半世紀、浪花にロマンありがとう——』63 頁による。

16) 鶴岡は 1940 年 2 月 1 日陸軍入りしたため、戦前の南海でプレーしたのは 1939 年のシーズンのみであった。

という<sup>17)</sup>。

さらに南海軍は、清水に、鶴岡の場合と同様、規約違反の支度金 5000 円を与えていた。そもそも南海軍は、球団創設の 1938 年、明治大学の強打者であった岩本義之を支度金 6000 円で、また前述の如く 39 年鶴岡を同額の支度金で入団させ、物議をかもしていた。三年連続の協定破りに連盟は、南海軍に対し、清水の登録は受け付けず、出場も認めない、その期間は未定とする、とのペナルティを科した。ところが南海軍は阪急戦で清水を登板させ、これにより南海軍は勝利をおさめた。「電鉄対抗戦」であるこの試合に敗れた阪急軍の怒りは格別で、南海軍のマネジャーを呼びつけ、始末書を取ったという<sup>18)</sup>。

### 3. 第二次大戦後— 2 リーグ制の発足と在阪大手私鉄の対応

1939 年、戦時体制への移行にともない日本職業野球連盟は日本野球連盟に改称した。しかし 1941 年 12 月の日米開戦以降、アメリカを発祥とするプロ野球をめぐる状況は悪化の一途を辿り、そのため日本野球連盟は 1944 年日本野球報国会に再度改称した末、同年 11 月 13 日活動休止に追い込まれた。

終戦後の 1945 年 11 月 6 日、日本野球連盟は復活宣言を行ない、11 月 23 日阪急西宮球場で「東西対抗戦」を開催、さらに 1946 年 3 月 27 日ペナントレースを再開した。1949 年 4 月、公職追放となり讀賣新聞社主の座を馬場恒悟に譲った正力松太郎は、日本野球連盟の名誉会長に就任し、わが国初のプロ野球コミッショナーとなった。正力は日本におけるプロ野球の一層の発展を期し、毎日新聞（社会人チーム・大毎野球団を擁しプロ野球に関心を示していた）に働きかけ、米大リーグに倣いプロ野球の 2 リーグ化を推進した。その結果、同年末にセントラル野球連盟（セントラル・リーグ）と太平洋野球連盟（パシフィック・リーグ）から成る 2 リーグ制が発足した。

セ・リーグには讀賣ジャイアンツ（讀賣新聞）のほか、大阪タイガース（阪

17) 鶴岡の場合は学部卒業とともにプロ入りしたことが母校 OB 会の怒りをかったが、清水の場合は、学部に進学してさらに野球部で活躍することが期待されていたため、事態はより深刻であった。

18) 出場停止が解禁になったのちも、清水は打線の援護に恵まれず、このシーズン 11 勝 23 敗と大幅な負け越しの成績に終わった。

神電気鉄道)、中日ドラゴンズ(中日新聞)、国鉄スワローズ(鉄道弘済会)、松竹ロビンス(松竹)、広島カープ、大洋ホエールズ(大洋漁業)、西日本パイレーツ(西日本新聞)の各チームが所属した<sup>19)</sup>。一方パ・リーグには、毎日新聞の結成した毎日オリオンズの他、阪急ブレーブス(京阪神急行電鉄)、南海ホークス(南海電気鉄道)<sup>20)</sup>、近鉄パールス(近畿日本鉄道)、西鉄ライオンズ(西日本鉄道)、東急フライヤーズ(東京急行電鉄)、大映スターズ(大映)が参加した。セ・リーグに比べパ・リーグはオーナー企業に私鉄が多く、しかもその中心は在阪私鉄であった。

#### 4. 南海球団の躍進と大阪球場の開場

1950年9月12日、南海電鉄はホークスのホームグラウンドとして、大阪球場を難波駅前に開場した<sup>21)</sup>。両翼91・5m、中堅115・8m、左・右中間109・7mのグラウンドを有し<sup>22)</sup>、収容能力31,379人の大阪球場は、開場から1988年まで南海ホークスの本拠地であったとともに、開場してしばらくは近鉄パールス(開場～1957年)、大洋松竹ロビンス(1953～54年)も本拠地球場とした<sup>23)</sup>。

その威容から「昭和の大阪城」とも呼ばれた大阪球場の建設計画が浮上したきっかけは、1948年のホークス優勝であった。この年南海は投手陣、野手陣とも戦力が充実しており、87勝49敗4分け、勝率6割4分、2位のジャイアンツに5ゲーム差、3位のタイガースには17ゲーム差、最下位のドラゴンズには34.5ゲームもの大差、と圧倒的な戦績で優勝した。

優勝決定後の11月15日、対ジャイアンツ最終戦が甲子園球場で行われた際、甲子園球場を訪れていた占領軍総司令部(GHQ)経済科学局長マーカッ

---

19) ( )内はオーナー企業の名称である。

20) 1947年、近畿日本グレートリングは、オーナー企業の分離にともない南海ホークスに改称した。

21) 以下大阪球場の開場に関する記述は、注記なき限り『さらば!南海ホークスー——激動の半世紀、浪花にロマンありがとうー』77頁、80～81頁による。

22) ただし建設当初両翼は84mであった。また着工は1950年1月、完成は同年9月12日と限られた工期で開場に至った(『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』30頁)

23) 『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』27頁。

ト少将のところへ南海の松浦竹松球団代表が挨拶に赴いた。野球愛好者のマーカット<sup>24)</sup>に「どこの都市を基盤とするチームか」「本拠地球場はどこか」と問われた松浦が、「大阪のチームだが本拠地球場がないので甲子園球場を使わせてもらっている」と答えると、その後占領軍幹部から「大阪に本拠地球場を作ってやってもいい」との連絡が入った。「球場を作ってやる」とは、建設用地が確保できれば建設許可を与え、建設に必要な鉄鋼材やセメントなどの購入許可を出す、ということに過ぎなかったが、この話に松浦はただちに反応し、電鉄本社を説得の上、球場建設予定地として候補に上ったのが大蔵省専売局の跡地であった。

またGHQとの交渉には、監督である鶴岡一人もこれにあたった。鶴岡はマーカットに「球場をつくるのはよいことだ、球場の周辺には不良児がおらん、国民のためになることだ、力を貸そうといわれた」と後に回想しているが、この時鶴岡が出会ったのがマーカットの副官をつとめていた“キャビー”こと原田恒男中尉であった。原田は米国サクラメント在住の少年時代、中等学校選抜野球大会優勝の“ご褒美”として渡米した広島商業学校野球部員の鶴岡一人と野球で対戦していた。そのため「球場ができたのはキャビーのおかげ」と鶴岡が語るほど、原田は球場建設のために奔走、努力を惜しまなかった<sup>25)</sup>。このように大阪球場の開設には、戦前に強引な手段を用いて鶴岡を南海軍に入団させたことも、少なからず貢献していたのである。

かくして南海電鉄は、大阪球場建設に向けて着々と準備を進めたが、同じ頃松竹ロビンスのオーナーであった田村駒治郎もまた、大阪・北区の玉江橋付近に球場を建設する構想を明らかにしていた。そこで1949年、日本野球連盟の関係者は南海と田村の球場建設予定地を視察、これに各球団の幹部も同行した。これについて後年松浦は、「北区の方に球場ができると甲子園、西宮両球場の入りが悪くなるということを阪神も阪急も計算していたし、田村のところは用地が狭すぎた。うちの方に決まるものと私は確信していたよ」と回想している

24) マーカットは「戦後の荒廃した日本人の心をなごませ、激励するには野球振興が一番だ」と常々口にしていたという。

25) 『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』29～30頁

が、事実阪神と阪急は松浦の予想通り田村の計画に反対し、他球団も田村の方は敷地が狭すぎると不満をもらしたため、南海の計画は田村のロビンスを除く全球団から承認を得た。その後日本野球連盟で開催された代表者会議では、議長となった連盟会長の鈴木龍二が「いっぺんに大阪に 2 球場を建設することは不可能であり、GHQ も認めないでしょう。そこでいずれかに絞りたい」と説明の上採決した結果、ここでもロビンスを除く全球団が南海の計画を支持した。

副収入を得るため観客席下に多数のテナントを入居させるスペースを確保し、また中心市街地ゆえ限られた敷地に極力多くの客席を設ける、という 2 つの目的によってスタンドを急傾斜に設計したため「すり鉢球場」とも呼ばれた大阪球場は、1951 年関西地区の球場としては初めて夜間照明設備を設置し、ナイトゲームを実施した<sup>26)</sup>。大阪球場の開設がホークスファンにとっていかに画期的な出来事であったかを、塩崎俊一は以下のように回想している<sup>27)</sup>。「とにかくスマートで立派な球場が出来た、まるで昭和の大阪城だと皆が胸をはっていた・・・。」「急傾斜のスタンド、回転式の入口と案内ガール、フィールドとスタンドの近さが見やすく・・・、ヤジもよく聞こえた。試合開始と終了のファンファーレの音・・・。すべてがモダンで格好よかった・・・。」

大阪球場におけるプロ野球の初試合は 1950 年 9 月 17 日の阪急対近鉄、南海対東急のダブルヘッダーで、さらに翌 18 日も西鉄対東急、南海対大映のダブルヘッダーで試合が開催された。パ・リーグ各球団がこぞって新球場の門出に花を添えたのである。しかし 18 日の第 2 試合となった南海対大映戦は、午後 4 時の試合開始となったため、1 対 1 で迎えた 7 回、夕暮れとなり審判団は「引き分け」を宣告した。これに激昂したファンが外野席からグラウンドになだれこんで抗議したため、球場側は警官隊を導入した。以後大阪球場は「騒動の球場」と化した。1953 年 7 月 23 日の阪神対讀賣戦では、判定を巡って外野席のファンが次々にグラウンドになだれこんで暴れ、1 時間にわたり混乱が続

26) 南海の大阪球場に続いて阪急も、1952 年西宮球場に夜間照明設備を完成させた。さらにこれらに遅れて 1956 年、タイガースの本拠地・甲子園球場にも夜間照明設備が完成した。

27) 塩崎俊一「グッドバイ南海 サヨナラ大阪球—不死鳥ホークスは必ず蘇生する—」（『さらば！南海ホークス— 激動の半世紀、浪花にロマンありがとう—』56 頁）。

いた<sup>28)</sup>。また 1954 年 7 月 25 日の阪神対中日戦でも、藤村富美男への審判の退場宣告を巡って紛糾、大群衆がグラウンドを占領して収拾がつかなくなり、鈴木龍二セ・リーグ会長が午後一一時、「阪神の放棄試合」を宣告した<sup>29)</sup>。

このように大阪球場は、南海難波駅前の、大阪ミナミの一等地という観客動員には絶好の場所に立地していたが、それによって日常生活において不平不満を抱え込んだ観客を多数引き寄せ、暴動が多発するというリスクも抱えることになったのである<sup>30)</sup>。また在阪の他球場に先駆けてナイトゲームのため照明設備を整えたことも、先に述べた試合の途中打ち切りにより生じた混乱の再発防止が一つの目的だったのではなかろうか。

以上のような面もあったが、在阪私鉄企業としては最古参ながら、プロ野球への参入に関しては逆に阪神・阪急の後塵を拝し、また戦前期には本格的な本拠地球場を有するに至らなかった南海は、1940 年代末～50 年代初頭、一転して鶴岡監督による積極的なチーム強化と、大都市の都心部における画期的な新球場の建設<sup>31)</sup>により、球界における阪神・阪急との地位を逆転させ、1951 年よりパ・リーグ 3 連覇を達成、また 1959 年には日本シリーズを初制覇して“涙の御堂筋パレード”を行なうなど、日本シリーズ三連覇（1956～58 年）の西鉄ライオンズを最大のライバルとして黄金時代を迎えた。

---

28) 讀賣が 5 対 2 とリードした 9 回裏、阪神の攻撃で一死二塁から金田正泰が右中間へ放った飛球を、右翼線審は讀賣の中堅手・与那嶺要が捕球したと判定、与那嶺が二塁に返球してゲームセットとなった。だが阪神は、与那嶺は扉に当って跳ね返ったところを捕ったと主張、これが騒動の火種となった（『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』30～31 頁）

29) 7 月 23 日から始まったこのカードは、前日まで阪神が連勝していたため大阪球場は超満員となっていた。延長 10 回裏、連続試合出場を続けていた藤村富美男に審判が退場を宣告、それを阻止しようとした松木謙治郎監督が主審に暴力を振るったことが、騒動のきっかけとなった（『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』30～31 頁）

30) 都心部ゆえ狭小な敷地への建設を余儀なくされた大阪球場は、先にも述べたように急傾斜したスタンド（観客席）を持つ「すり鉢型球場」であった。こうしたスタジアムの形状もまた、観客の興奮を高め、暴動が頻発する要因となったのではないだろうか。

31) 大阪球場開場から七年後の 1957 年 10 月、創業 70 周年記念事業の一環として難波駅南側の社有地に年に南海会館（地上 8 階、地下 2 階、延面積 3 万 8328m<sup>2</sup>）が完成した。同開館には西日本独占の洋面ロードショー劇場であるなんば大劇場を含む三つの映画劇場が設けられた（青木栄一 1995、109 頁）。1950 年代の南海電鉄は、難波ターミナルの周辺において、戦後期の代表的娯楽であったプロ野球と映画の「殿堂」を整備したのである。

また後述のごとく、戦後、在阪私鉄として最後発の球団を発足させた近鉄の場合、大阪球場が完成するまでの南海球団が甲子園球場や西宮球場を借用していたのと同様、地の利に恵まれ、ナイター設備を有する大阪球場を借用することで、発足直後の苦しい時期を乗り切ることができた。

このように南海電鉄による大阪球場の開設は、ホークス躍進の基盤となったのみならず、発足間もない近鉄球団を後押しし、さらに甲子園に夜間照明設備が完成するまでのタイガースもナイトゲームには大阪球場を使用する<sup>32)</sup>といった具合に、在阪私鉄系球団全体の発展にも大きく貢献するものであった。

## 5. 近鉄の球界参入<sup>33)</sup>

戦時中関西急行鉄道と南海鉄道の統合によって発足した近鉄（近畿日本鉄道）は、南海鉄道が設立・運営していたプロ野球チーム・南海軍を継承した<sup>34)</sup>が、戦後旧南海が南海電気鉄道として分離独立したため、近鉄はプロ野球チームを失った。しかしその後、日本野球連盟のコミッショナーに就任した正力松太郎が一リーグ制八球団から一〇球団への拡張、さらには二リーグ制一二球団の構想を発表したことから、近鉄はプロ野球への再参入を決断した。1949年9月6日の役員会では、近鉄がプロ野球の球団経営に再び進出する理由として「我国屈指の球場たる藤井寺を擁する当社は、その高度の活用を図り、会社の宣伝、運輸収入の増加、延いては日本職業野球の健全な発展に寄与するため、この際職業野球チームを組織し、日本野球連盟への参加を図りたい」と、戦前から保有する藤井寺球場の活用が理由の一つとしてあげられている。

かくして1949年9月14日、近鉄は日本野球連盟への加盟を申請した。この際、近鉄以外にも西日本鉄道、毎日新聞社、大洋漁業、広島野球倶楽部など

32) 「大阪地方も阪神、南海、阪急、近鉄と・・・チーム・・・が集まっているが、それぞれグラウンドを持っており、難波、西宮にはナイター設備もあり・・・。たゞセ・リーグ関係にナイター球場がないからパ・リーグが意地悪すれば、大阪ではセのナイターは見られない懸念がある。・・・」 「球場難に割り込み（木曜放談 プロ野球）」 『東京新聞』昭和30年1月13日

33) 以下近鉄球団の設立に関する記述は近畿日本鉄道株式会社 2010、216 頁による。

34) 1944年、南海軍は戦時統制によるオーナー企業の合併（南海鉄道と関西急行鉄道の合併により近畿日本鉄道が発足）にともない、球団名を近畿日本に改称した。

が相次いでプロ野球への参加を表明し、これら新球団の日本野球連盟への加盟の可否は、1949年9月末のオーナー会議での検討に委ねられた。その結果は、大阪タイガース、阪急ブレーブス、南海ホークス、東急フライヤーズ、大映スターズの5球団が賛成、讀賣ジャイアンツ、中日ドラゴンズ、太陽ロビンスの3球団は反対であった。承認には全会一致を要したため、新球団の加盟案は否決された。

その後10月26日、大阪タイガースが賛成から反対に転じ、賛否が4対4の同数になったことから、事態は2リーグ分裂に向けて進展し、11月26日の代表者会議で2リーグ制への移行が決定した。かくしてパ・リーグに加盟することとなった近鉄は、12月1日に近鉄野球株式会社（資本金1000万円）を設立、ニックネームは一般から公募し、多数の応募の中からパルスに決定した。

## 6. 近鉄球団と球場問題

1949年12月15日、新球団・近鉄パルスは第一次の陣容を発表、またこの際専用球場は藤井寺球場とすることも発表された。しかしこの時点で藤井寺球場は建設からすでに20年を経ていたため、大改装を実施し、内野席2万2000人、外野席1万人、計3万2000人収容の「プロの使用に耐えられる球場」とした。翌1950年3月12日には藤井寺球場でプロ野球の初試合が開催された。

しかし1951年大阪球場にナイター設備が完成すると、近鉄球団は大阪球場を使用することが多くなり、ナイター設備を欠く藤井寺球場での試合開催回数は減少した。1956年には近鉄対南海戦22試合中20試合が大阪球場で開催されたのに対し、藤井寺球場ではわずか1試合が行われたのみで、藤井寺球場は実質的に二軍の専用球場となった。一方で近鉄は、1958年5月から、国鉄城東線（1961年4月25日より大阪環状線）森ノ宮駅近くの日生球場（日本生命球場）に自らナイター設備を整備し、ナイトゲーム開催時の準本拠地として使用を開始した。

日生球場は1950年日本生命が従業員の福利厚生のため建設した球場で、両翼90・4m、中堅116m、交通の便に恵まれ、またスタンドとグラウンドの距

離が他の球場に比べ近かったため観客には好評であったが、ビジターチームの選手が通路での着替えを強いられるなど、施設面での不備からプロ選手の評価は高くなかったという<sup>35)</sup>。また球場の周辺が官庁街であったため、用地の確保には制限があった。その結果グラウンドの左中間、右中間は膨らみが乏しく“ホームランの出やすい球場”と言われ、またネット裏や内野の観客席も狭かった。収容人員も 2 万 500 人と、プロ野球の試合を日常的に行うにはいささか控え目なものであったが、それは同球場が社会人チーム日本生命のために作られた球場で、社会人野球や関西六大学野球、高校野球の大阪府大会といったアマチュア野球の使用を想定していたためであった<sup>36)</sup>。

日生球場で初のプロ野球の試合は、球場完成の翌日にあたる 1950 年 7 月 1 日の南海対毎日戦で、のちに日生球場を日常的に使用することとなった近鉄球団の第 1 戦は翌 1950 年 7 月 2 日の対南海戦であった。だがその後近鉄球団は、1951 年ナイター設備を完成させた大阪球場で試合を行なうことが多くなり、日生球場では 1950 年 5 試合、1954 年 2 試合と、8 年間でわずか 7 試合に使用したのみであった。その日生球場が近鉄の“第 2 本拠地球場”化したのは、1958 年 5 月 19 日、同球場にナイター設備が完成して以降のことであった。この改修に際し、照明塔、両翼の飛球防止ネットなどの費用 1 億 2000 万円を近鉄側が全額負担した<sup>37)</sup>。さらに 1962 年 5 月、近鉄は収容人員を増加させるため日生球場の改修工事を実施した<sup>38)</sup>

---

35) 「藤井寺球場 追憶のスタジアム」。1970 年代後半から 80 年代の近鉄バファローズで“いてまえ打線”の中核として度々の優勝にも貢献した栗橋茂は、日生球場の印象を以下のように回想している。栗橋が 1974 年の近鉄入団に際し初めて訪れた日生球場の第一印象は「グラウンドが狭い」ことで、彼が駒澤大学野球部の選手としてプレーした明治神宮球場と比べても狭く感じたという。また入団後の栗橋は、藤井寺球場の照明設備完成まで日生球場で試合をすることが多かったが、照明が暗かったためしばしばコウモリが飛ぶのを目にしたという。さらに栗橋が日生球場について不可解に感じたのは、ビジター用のロッカーやシャワールームが設けられておらず、そのため冷房設備のないところに長イスを並べて着替えなければならないことで、「とくにビジターチームにとっては厳しい球場だったのではないか」と栗橋は述べている。(『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』35 頁)

36) 『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』46 頁

37) 『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』47 頁

38) 近畿日本鉄道株式会社 2010、82 頁、319 頁。

近鉄球団（パールズ、バファローを経て1962年よりバファローズ）の存在がプロ野球ファンに初めて強く印象付けられたのは1969年、「魔術師」・三原脩が監督に就任して二年目のこの年、阪急ブレーブスとパ・リーグの覇権を巡り「死闘」を繰り広げた「藤井寺決戦」以降のことと言われる<sup>39)</sup>。それとともに観客が急増した近鉄球団は、地の利に恵まれ、また照明施設が整えられた日生球場での試合開催を増やした<sup>40)</sup>。しかしこれはルール違反として、オーナー会議で厳しく追及された<sup>41)</sup>。かくして藤井寺球場を本拠地として活用せざるを得ない状況に追い込まれた近鉄球団は、1972年藤井寺球場の内外野席改築増設と夜間照明機器の新設工事を行った。

しかし藤井寺球場の周辺は「住宅専用区域指定」の地域であったため、周辺住民は「ナイター施設反対」で同工事を提訴、以後1973～83年、ナイター設備稼働を目指し関係者は努力を重ねた。外野には試合開始と同時に外壁がセリ上がる昇降式防音壁を設置し、また外野後方にある公団住宅の窓には防音サッシをとりつけ、さらに球場周辺の環境整備の一環として藤井寺駅の改良まで行った。併行して住民の了解を得る努力も重ね、ナイター訴訟問題で球団の勝訴となったのは1983年9月26日、またナイター設備の工事は同年11月21日再開された、1984年4月6日、84年度の藤井寺球場開幕戦となった対西武戦が藤井寺球場初のナイター（ナイトゲーム）となった<sup>42)</sup>。同年7月には藤井寺球場で初となるオールスターゲームが開催された。さらに1985年には、人工

39) 『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』34頁、36頁

40) 1966年～96年の日本プロ野球の年間試合数は各チーム130試合で、うち半分にあたる65試合が本拠地球場で開催されたが、藤井寺球場におけるバファローズの本拠地試合開催数は1972年まで10試合未満にとどまり、また以後1982年までにおいても20試合を超えることはなかった。つまり1970年代までのバファローズは、主催試合の三分の二以上を日生球場などで開催していたのである（『藤井寺球場 追憶のスタジアム』70頁）

41) この際球団代表が、近鉄沿線の名古屋や四日市の近辺でも試合の出来る場所を探している、と弁明したところ、名古屋（中京地区）を本拠地とする中日ドラゴンズの関係者が反発し、試合を開催する場合は10億円の支払いを要求する事態に発展した。（『藤井寺球場 追憶のスタジアム』70頁）

42) 以上戦後の藤井寺球場に関する記述は、『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』34～36頁による。

芝の敷設と内野スタンドの拡張工事などを実施した<sup>43)</sup>。

これらの投資が実り、すでに 1979 年初のリーグ優勝を果たしていた近鉄球団は、1980 年と 89 年の二度リーグで優勝した<sup>44)</sup>。また 1980 年代前半までおおむね 1 万人に満たなかった藤井寺球場の一試合当たり入場者数も、80 年代後半以降大阪ドームへ本拠地が移転する 1996 年まで 1 万 5 千人前後で推移した<sup>45)</sup>。しかし在阪私鉄の運営する球団としては唯一、長きにわたり本拠地を巡る混乱が絶えなかったことは、ファンと球団の良好な関係を築く上で不利に作用したものと思われる<sup>46)</sup>。

## 7. パ・リーグの危機と南海・近鉄両球団の経営環境

1950 年代の終わりから、プロ野球界の流れは、在阪私鉄系球団の多くが属するパ・リーグにとっては厳しい方向へと進んだ。1959 年 6 月 25 日、プロ野球初の天覧試合となった讀賣－阪神戦が後樂園球場で開催された。前年東京六大学野球のスーパースターとして立教大学より入団した長嶋茂雄は、この試合でタイガースのエース・村山実から劇的なサヨナラ本塁打を放った。これにより長嶋の人気は不動のものとなり、王貞治との ON 砲によりジャイアンツの 9 年連続日本一 (V9) に貢献し、プロ野球人気の牽引車となった<sup>47)</sup>。これにより次第にセ・リーグとパ・リーグの人気 (観客動員) は差が開いていった。

またパ・リーグが苦境に陥った理由としては、マスメディアとの関係も重要である。セ・リーグの中心をなすジャイアンツを讀賣新聞、報知新聞、日本テレビ放送網と全国に影響力を及ぼすメディア企業がバックアップしていたのに対し、パ・リーグの場合、オリオンズのオーナー企業となった毎日新聞に、セ・リーグの讀賣新聞と同様の働きが期待されていた。しかしチーム発足当初

43) 近畿日本鉄道株式会社 2010、409 頁。

44) 近畿日本鉄道株式会社 2010、500 頁

45) 「藤井寺球場 追憶のスタジアム」73 頁のグラフ「1 試合平均入場者数」による。

46) 藤井寺球場を建設した大阪鉄道は、大阪電気軌道の中核として発展してきた近鉄の歴史の中では傍系の企業で、このことも同球場が他の在阪私鉄によって建設・運営された球場に比べ、長らく不安定な扱いを受けて来たことの一因かと推察される。

47) 戦前に強引ともいえる方法で次々に有力選手を獲得した南海は、この長嶋にも熱心に働きかけ、入団寸前にまでこぎつけたが、結局長嶋が入団したのはジャイアンツであった。

におけるタイガースからの強引な選手引き抜きが災いして、オリオンズの人気は低迷した。そのため毎日新聞は次第にプロ野球に対する意欲を低下させ、ついには大映と合併して大毎オリオンズとなり、経営の主導権は次第に大映社長の永田雅一に移って行った。

1965年、第一回のドラフト会議が開催された。くじ引きで選手との入団交渉権を球団に与えることにより、契約金の高騰を防ぎ、また各球団の勢力を均衡化するのがその目的であった。その背景には、人気と財力にものを言わせて有力アマチュア選手を独占する一部球団の独走を抑えたいというパ・リーグ側の思惑があった（ドラフトの導入を提起したのも西鉄球団社長の西亦次郎であった）。

しかし1969年の「黒い霧事件」では、野球賭博への関与が疑われた選手が多数処分を受け、中には球界を永久追放になった者もあったが、特にパ・リーグで関与したとみられるものが多かったことで、さらにパ・リーグは大きなダメージを受け、観客動員も大幅に落ち込み、“V9”の黄金時代を謳歌するジャイアンツを中心とするセ・リーグに大きく差をつけられた。このようにパ・リーグの人気低迷によって、これに属する南海ホークスと近鉄バファローズは厳しい経営環境のもとでの運営を余儀なくされることとなった。

## 8. 南海と近鉄のプロ野球からの撤退

1970年代後半から80年代のプロ野球は、ドラフト制度導入の効果が表れ、優勝チームが多様化した。パ・リーグでは70年代に入って“常勝チーム”となった阪急ブレーブスが1975年初の日本一に輝き、以後日本シリーズ三連覇の快挙を達成した。また73年にはホークスが南海として最後の優勝を遂げた。74年にはロッテオリオンズが日本シリーズを制し、また近鉄バファローズも75年後期のみながら初の優勝に輝き、さらに79年には阪急とのプレーオフを制して初のリーグ優勝を遂げた。80年代に入ると日本ハムが1981年リーグ初優勝、続いて西武が82年から日本シリーズを連覇、黄金時代の幕開けとなった。

しかし1980年代の末、プロ野球界には大きな変動が生じた。1989年、ダ

イーが南海電鉄よりホークスを買収し、チーム名を福岡ダイエーホークスと改めた上、本拠地を大阪府から福岡県に移転した。これにより南海電鉄はプロ野球から撤退することとなった<sup>48)</sup>。

塩崎俊一は南海電鉄のプロ野球からの撤退に際してもものした一文<sup>49)</sup>において、ホークスの観客動員と大阪球場の経営に関し、以下のように述べている。大阪球場は、ホークスが常に優勝を争っていた時代においても、また恵まれた立地条件にありながら、観客動員の芳しくない球場であった。南海ホークスの最終年となった 1988 年に 90 万人と入場者数の「新記録」が達成されたように、むしろ成績低迷が続いた時代の方が観客動員数そのものは多かった。それでも球団がもたらす赤字が年間 10 億円に達したことが、球団の経営権を譲渡せざるを得なくなった原因で、1980 年代末において入場料収入で球団を採算のとれるものとするためには、入場者数を「新記録」の二倍以上にあたる年間 200 万人まで増やすことが必要であった。

さらに塩崎は、「黄金時代」と「低迷期」の相違は、むしろ観客動員よりもテレビ放映の回数によく表れていると、表 1 および表 2 の示すところに抛りながら以下のように述べる。1963 年と南海最後の年となった 1988 年のホークスとライオンズとの大阪球場における対戦についてみると（63 年は西鉄として最後の優勝となった年、88 年は西武の「黄金期」で、いずれの年もライオンズ戦はパ・リーグを代表する人気カード）、1963 年には入場者数の判明する 13 試合中入場者数が 2 万人を超えた試合が最終二戦のみであったのに対し、88 年は 11 試合中観客数が 2 万人以下にとどまったのは最集平日でデーゲームの一試合のみであった。しかし 1963 年当時は、大阪地区において同カードのテレビ中継が四つの放送局によって年間 10 回行われていたのに対し、88 年は四局で 4 回と半分以下に減少していた<sup>50)</sup>。このように、南海ホークスの「人気

48) なおこの年、オリックス（オリエン特・リース改め）が阪急電鉄よりブレーブスを買収し、チーム名をオリックス・ブレーブスとした。これにより阪急電鉄もプロ野球から撤退することとなった。

49) 塩崎俊一「グッドバイ南海 サヨナラ大阪球—不死鳥ホークスは必らず蘇生する—」57 頁。

50) これらにはプロ野球の人気もつばらセ・リーグ（関西地区においては阪神タイガース）へと集中したことも影響していたものと考えられる。また 1963 年に 9 回あった実況放送で過半数の 5 回を担当していた YTV（よみうりテレビ）が、1988 年には全く南海—西武戦の実況放送を行っていないのは、讀賣ジャイアンツと深い関係を持つ同局が、セ・リーグの試合を中心に放送する方針を明確化したことを示すものと考えられる。

**表 1 1963 年 南海—西鉄（大阪球場）**

月	日	入場者数	TV 放映
5	7	7,222	MBS（毎日放送）
	23	6,590	KTV（関西テレビ）
6	15	12,677	
7	16	—	YTV（よみうりテレビ）
	16	13,650	
8	3	11,531	YTV
	4	—	NHK YTV
	4	16,710	YTV
	5	9,068	
9	24	—	
	24	15,428	KTV
	26	10,421	NHK
	27	10,229	
10	15	27,343	YTV
	16	31,404	

**表 2 1988 年 南海—西武（大阪球場）**

月	日	入場者数	TV 放映
4	30	20,000	MBS
5	1	32,000	NHK
	31	20,000	テレビ大阪
6	1	20,000	
8	9	28,000	
	11	28,000	
9	23	30,000	
	25	25,000	ABC（朝日放送）
	26	20,000	
10	11	22,000	
	12	10,000	

凋落」は、観客動員よりもテレビ放映の状況により明確に現れていた。

以上塩崎の述べるところによれば、「黄金時代」における南海ホークスの観客動員は、独立採算を可能にする水準にはほど遠いものであった。にもかかわらずホークスが強豪チームとして華々しい成績を残せたのは、オーナー企業である南海電鉄が利用者へのサービスとして採算を度外視して球団を支えていたからではないか。しかしその後、在阪私鉄各社の経営環境が厳しさを増す中、そのような支援は困難となり、1980 年代末（昭和の終わり）に球団経営からの撤退を余儀なくされたものと思われる。

さらに 21 世紀初頭には、在阪私鉄の運営する球団として唯一パ・リーグに残ったバファローズが深刻な状況に直面した。しかもそれはパ・リーグの存亡にもかかわるものであった。バファローズは 1997 年本拠地を大阪ドームへ移し、また 1999 年には、地元企業との提携ならびに地域密着を目指してチーム名を大阪近鉄バファローズに改めた。こうした努力が実を結びパ・リーグ優勝を達成したバファローズではあったが、球団経営は好転せず、命名権譲渡によって苦境を切り抜けようとしたもののそれもかなわず、その結果 2004 年、大阪近鉄バファローズはオリックス・ブルーウェーブと合併し、近鉄は球団経営より退くこととなった。企業経営のグローバル化が進展する中、多額の赤字を生ずる球団を抱え続けることは株主や鉄道利用者への説明責任を果たせないとして苦渋の決断であった。

近鉄の撤退はパ・リーグの消滅＝1 リーグ制移行という球界再編問題に発展したが、結局楽天の参入で新球団東北楽天ゴールデンイーグルス（楽天イーグルス）が結成され、パ・リーグは消滅の危機から脱した。

## おわりに

周知のごとく南海は、在阪私鉄でもっとも長い歴史を誇る名門企業であるが、プロ野球への参入に関しては、阪神や阪急に後れをとり、またそのため貧弱な陣容でリーグ戦に臨まなければならなかった。しかも先行する阪神や阪急とは異なり、戦前期には本格的な本拠地球場を保有していなかった。しかし南海は、このような逆境を覆すべく、積極的なチーム補強に邁進した。そうした

努力は第二次世界大戦後に実り、南海ホークスは戦後初のリーグ戦で「球界の盟主」讀賣ジャイアンツを制して優勝、一躍強豪チームに躍進した。さらにこのような好戦績に後押しされ、難波ターミナルの隣という抜群の好立地に本格的な本拠地となる大阪球場を建設、さらに関西初の夜間照明施設を整備してナイトゲームの開催を可能とし、阪神や阪急に対する遅れを見事挽回するに至ったのである。

一方近鉄の場合、日本プロ野球の発足以前から南大阪線の前身企業である大阪鉄道が藤井寺球場という本格的球場を保有し、この点では阪急や南海に先行していたが、プロ野球との関係は戦時中における南海との合併によって初めて生じたもので、戦前段階では主体的なプロ野球との関わりを持たなかった。しかし戦後の「二リーグ分裂」に際し、藤井寺球場の有効活用を一つの目的として、初めて主体的にプロ野球に参入した。だが結果的に藤井寺球場は有効に活用されず、発足当初は南海の大阪球場に、またその後は沿線外の森ノ宮に立地する日生球場に依存する形で球団を運営するという、本末顛倒の展開を示した<sup>51)</sup>。

このように南海と近鉄には、共にプロ野球の運営に関わった在阪私鉄企業であり、また阪神・阪急に比べ球界参入に遅れたという共通点がある一方で、戦後1950年代までの歩みにおいては対象的で、それは躍進著しい南海に対し暗中模索の近鉄、と要約できよう。しかしながら両社（両チーム）の1960年代以降における歩みは、おおむね同一の方向を辿った。1950年代の末から次第に明確となったパ・リーグの観客動員力における劣位（その主たる原因はマスメディアとの結びつきの弱さにあった）に規定され、両球団は厳しい経営環境に追い込まれていく。さらに交通市場全体における鉄道の地位低下、関西経済の長期的・相対的地位低下、1987年の国鉄民営化前後から顕著となった国鉄・JR西日本の攻勢、企業経営のグローバル化、といった経営環境の変化にも影

---

51) 日生球場の立地する森ノ宮は、大阪環状線（国鉄 → JR）を介して、近鉄にとっては本線格にあたる奈良線、大阪線と至近で接続しており（1932年、大阪環状線の前身である城東線に森ノ宮駅、さらに近鉄との乗り換え駅となる鶴橋駅が開設された）、従って近鉄の利用者増加に対する日生球場の貢献度は、南大阪線の沿線にある藤井寺球場よりも高かったものと推察される。

響を受け、在阪大手私鉄各社による球団の維持は困難になった。その結果、まず 1980 年代末（昭和の終わり）に南海と阪急が球団経営から撤退し、さらに 21 世紀初頭の 2004 年、近鉄もまた球団経営から撤退した。その結果在阪私鉄が運営するプロ野球チームは阪神タイガースのみとなったのである<sup>52)</sup>。

### 参考文献

- 青木栄一「南海電気鉄道のあゆみ（戦後編）—路線網の整備と地域開発—」（『鉄道ピクトリアル』No.615〈特集〉南海電気鉄道、1995 年）
- 『阪神電気鉄道百年史』（阪神電気鉄道株式会社、2005 年）
- 『京阪百年の歩み』（京阪電気鉄道株式会社、2011 年）
- 『近畿日本鉄道 100 年のあゆみ』（近畿日本鉄道株式会社、2010 年）
- 『さらば！ 南海ホークスー ——激動の半世紀、浪花にロマンありがとう——』別冊週刊ベースボール冬季号、ベースボール・マガジン社、1988 年
- 『激動の昭和スポーツ史①「プロ野球上」日本職業野球前夜からプロ野球興隆 ON 時代へ』ベースボール・マガジン社、1989 年
- 『追憶のロスト・ボールパーク 失われた球場物語』ベースボール・マガジン社、2013 年
- 「藤井寺球場 追憶のスタジアム」『ベースボール・マガジン』第 41 巻第 11 号、ベースボール・マガジン社、2017 年）。

---

52) 1989 年のプレーブス売却でいったん球団経営から撤退した阪急は、2006 年阪神と経営統合したことで、再びプロ野球の球団経営に関与することとなった。